

第三部 人間における様々な決断

(一) 進学に関わる話

ここまで、だからだと私生活や私個人の辿った研究の実態について書いてきた。その理由はずで最初の部分に書き残している。そこで遅まきながら本題に戻って、人間が一生の間に繰り返し返す**決断**の問題について書き進めたいと思う。そこで最初に決断というここでのキーワードについて、少々説明を加えたい。

今、心理学なら「認知」、同じ心理学で社会心理学になると意志決定というテーマが話題の中心にあると思う。

その社会心理学ではかつて、ゲームの理論が話題なり、そこで人間同士の**協力と裏切り**、という問題が大きく取り上げられてきた。時代を経て、それが発展する過程の中で決断、つまり**デシジョン** **メイキング**という問題に移っている。

この分野で私が一番関心を持ったのが、現役時代に紫綬褒章を、また昨年二〇一三年秋に文化功労章を受けた元同僚の山岸俊夫氏の研究である。

彼は日本人の間で最近余り注目されなくなった**信頼**という言葉に注目し、信用と信頼はどう違うか。それは国家や文化の違いにおいてどう扱われているのか、という点に注目した。その成果からアメリカの文化的な社会と日本の文化社会は今や根本的に違っている。アメリカの社会を動かすのは**信頼**、そして現在の日本社会を動かしているのは**信用**だ、というのである。

私は彼のこの実験結果に基づく結論に頭が下がる。だから、彼が次々と国内外から評価され、表彰されるのも当然だと思っている。さて、そこで問題になるのが決断という話である。

アメリカ人の多くは他者を信頼して決断を下す。手短な話で言えば、アメリカ人は気楽に自宅の鍵を他人に貸し与える。そこでは人間と人間の間の信頼関係が前提になる。

しかし、我々日本人は他人を心から信頼しない。色々過去の実績を踏まえ、慎重な信用のすえでさえ、他人に鍵を渡さない。だから、今の日本人の多くは悩むだけで決断が下せない。しかし結果から見れば、我々日本人もまた否応なく決断を迫られる。高校の進学問題に始まり、大学の選択から就職、さらに結婚や車・住宅の購入においても、我々は自分なりの答えを出さざるを得ない。

他者および他者の意見や言葉を素直に受け入れられないが故の迷いに迷った怪しげな決断の時、一体何に心を配って結論を出すべきか。この本の主題

は真にそこにある。

気軽な例を挙げれば、デパートで買物に多大な時間を掛ける女性がいる。試験問題の回答を早々に書き終えながら、制限時間一杯、回答書を提出出来ない学生もいる。また、でき上がった物を見ながら、愚痴のつづく人もいる。そうした人は決断という一つの行為に迷いつづける人。さらにいうなら、自分にも他人にも、信頼が持てない人。別な言葉を使うと、激しい恋ができず、時間に流されながら成り行きに身を任せてしまう人とも言える。でもしかし、結果的にそれもまた一種の決断の場面ではある。

最初に述べたように、すべての人にとって、人生は行き先の書いていない片道切符で汽車に乗るようなものだ。長い人生において、決断に必要な情報など、決して手に入るものではない。でも、決断なしの人生は考えられない。そんな時こそ、ここから先の話に耳を傾けて欲しいと思う。

高校の進学問題

子供が中学から高校に移る時、高校の受験という問題が前面に出てくる。義務教育の小学校や中学と違い、幾多の高校が目の前にある。そんな時、本人の脇から父親や母親が口を出す。

一流校がいいのよ。誰々さんと誰々さんも行っているでしょう。――
――そういうのは多分、自分の納得した仕事を持たない専業主婦の母親。

――いい高校に入れば、競争相手に恵まれるし、いい大学にも入り易い。お父さんを見なさい。選んだ高校が悪かったから、大学だって三流。その結果が、今の会社ではいつまでたっても係長だ。お前、そんなの嫌だろう。――

これはいつまでもなく、父親の言葉。しかし、高校への進学問題をその程度の話で決めてはいけない。

私の長女（戸籍上の次女）は中学の三年の進路指導で、担任から一番上にランクされる高校の選択を進められた。確かにその時点で、娘の成績も十分にその資格があった。が、娘は教師に理由を言わないまま、その話を断った。そして帰宅後、父親の私に囁いた。

「あのレベルの高校に入ると、常に周りを気にすることになるでしょ。それでどう足掻いたところで、決して勝てない相手もいる筈よ。そしたら私自身、潰れてしまうもの。」

これはこれなりに一応の理窟がある。そこで父親である私は一つ質問を試みた。

「じゃ、二番目のレベルの学校にするのかい？」

「いや、あそこも止める。全員、高いレベルの大学を狙う学校だけれど、私の担任が進めた高校の生徒に対して、常に劣等感を抱えたまま大学に入るよ

うよ。だから、あそこも止める。私は自由に解放された高校生活を送りたいから、レベルスリーの高校にする。」

―それもいいね。―

とは私も言えない。しかし、進学は本人の自由だと言っていた手前、私は黙って新聞を読む。

ただ、娘の決断で、少し心配なことがある。それは高校時代に生涯の良き友達がその高校生活で出来るかどうかだ。事実、今四七歳になる筈の娘は高校時代からの親しい友人を持っていない。

人生を長く生きていると、つくづく思うことがある。それは生涯変わらぬ良き友、良き理解者こそ己の人生で一番頼りになるということだ。

友達方より来る、また楽しからず

とは古い中国の言葉。それを私の言葉に書き換えると、

人生最高の時、傍に心の許しあえる友達がいて欲しい。そして最悪の時無条件で話し合い、慰めてくれる友人が欲しい。

ということになる。人間の一生で間違はなく金は不可欠である。しかし、金だけで人生は完結しない。愛しい家族も必要だし、絶対の信頼を置ける友人も一人や二人欠かせない。

高校受験の時、この一点も是非忘れないで欲しいものだ。

大学進学の問題点

進学高校の選択問題に比べて、大学の選択問題は難しい。その結果が一気に、人生問題へと繋がっているからだ。文系か、理系か。一流か三流か。国立か私立か。そのどれもが一番大事な人生のスタートに直結している。

最近、日本国内の大学はすっかり変わってしまった。山崎豊子の描いた「白い巨塔」の問題よりも、もっと卑近で愚かしい話が累積している。その原因はすべて、現代の深刻な社会問題、つまり少子化にある。

今の大学では学生の数さえ定員満たない。勿論、かつて定員の数倍から数十倍もあった受験生が少なくなれば、各大学の臨時収入も減ってしまう。そこで経営に困った大学側は、無い知恵を絞って宣伝に走る。その内容を調べると、政治家が選挙で叫ぶ数々の公約によく似ている。

大学と受験生の立場が急に変わった。かつては大学側の買い手市場。しかし今は、受験生側の売り手市場と言えるかもしれない。だが、受験生は手軽

に入る情報に頼った決断をしてはいけない。

人の世には媚びる、媚びられるという場面が多い。しかし、媚びるにせよ媚びられるにせよ、そこには大きな落とし穴が待っている。慣れあい、騙し合いの結末はいつも悲惨だ。

共通一次試験の内容が来年から変わる、変えられるという話を聞いた。だがいづれにしても、自分自身の厳しい努力もなしに、適当にやった試験結果で受験大学を決めるのは大いに間違っている。大学の出口は社会と繋がり、若者の人生がそこで決まる可能性があるからだ。

文部科学省の決定など、朝令暮改、も甚だしい。問題はその時の政府にもある。そこで曖昧な基準から選ばれた審議会委員の無責任な姿勢も問題になるのだからもつと、受験生は考えて欲しい。

一流と言われる大学になればなるほど、合格ラインは高くて難しい。しかし、国立大学の内部で生きた人間の知識で言えば、一流といえども、その大学もしくは大学院を出る道は他にある。是非、どこから出ているこうした情報も的確に知る努力もして欲しい。

だからといって、一流大学卒の肩書だけで真面目な人生が出来る、というのは無知に過ぎない。

理系か文系か

子供が大学を選ぶ際、同時に問題になるのが文系を選ぶか、それとも理系を選ぶか、という問題がある。最近、耳にする多くの話では子供が好きか嫌いという点だけが主な選択理由になり、それに加えて、本人にとつての試験の難しさが選択の決定要因になるらしい。しかしこれを私の用語でいうなら、それは選択でも、ましてや決断などという話にならない。そこにはただ単に追い込まれ、押し流されて行く若者の悲しい姿があるだけだ。

今まさに日本の文科省によって変更されようとしている話だが、かつて小中高では一貫してゆとり教育が叫ばれていた。まだ幼気な子供達の自由にしても、中高生のゆとり教育にしても、その背後にある自由という言葉の意味を日本の社会全体が理解していないようだ。言い換えれば、自由という言葉に含まれる権利に加え、自由を手にする人間が背負うべき義務とか責任という側面に気配りがない。自由は勝手気儘とは違う話。また権利だけある自由などは世界の歴史を見てもあり得ない。

子供や若者が理系か文系かを考えるとき、目先の理由で決め手はいけない。もつと、もつと先を見詰め、自分の一生でなにが出来るか、何を職業にしたいかを考え、そのゴールに向かうために文系か、理系かという話の決断に至る必要がある。

大学教師の現役を離れて十年、思い出すと、身近な学生の多くが文系の学問の一部だけに関心を示し、理系は理系で文系学問には一切関心も知識もない人種が多く卒業していった。これはしかし、歪な話と言えないだろうか。我々の生きる社会には多面性がある。だから人間もしくは一市民として生きるには多面的な視野と理解力が欠かせない。ところが、そうした基本的な社会的要請に応えられるような若者は少なかった。

私は今、政治家も一般市民も、みんな媚びに生き、媚びながら死んでしまう時代だと思っている。だがそれでは、中心軸のない社会ができ上がり、行き先不明の社会、ただ漂うだけの社会が私達日本人を取り巻いているようなものだ。

若者よ、そんな国家や社会に頼るな。と同時に、我々年寄りも、ここ一番頑張つて、この社会を立て直そう。しかしここで、こんな話を語るのは間違いだらう。話が飛躍し過ぎる、という非難の声が聞こえる。

(二) 小中高校生の自殺

ここで時間の針を動かし、話題を一寸前の時間帯に戻す。それは一年に三万人と言われる我が国の自殺問題の一面を占める話。小中高生に広がる自殺の問題に他ならない。

不登校の話は前以て聞かえていた。学校崩壊とか学級崩壊という話もそれにつづく。しかもその上、学校の先生方の不登校もあれば、自殺する教師も毎年ある程度はいる、ということも耳にする。

過去を振り返ってみても、こどもの自殺はあつたらう。教師の自殺にしても、責任感の人一倍強い人の自殺もあつたことは否定出来ない。しかし、今学校を巡って起こる自殺は過去の自殺問題と本質的に違うようだ。

今や日本の子供と大人は弱すぎる。脆弱といつてもいいかもしれない。

弱すぎる親が自分の子供をさらに軟弱にしてしまう。強く我慢しなさいとか、こうして乗り越えるのよ、という言葉が今の親には使えない。

本来なら、自殺という行為には精神的に激しい苦痛や苦悩が付きまとう。高校二年の時に自殺を試みた私の場合、そこに耐え難い、極端な孤独が加わった。だから、子供や若者が自殺しようとする場合、そこにかつては典型的な**決断**が必要とされた。しかし、今多く見られる自殺という行為に、その決断部分が欠けている。

数だけ多くなった現在の子供の自殺は、自殺に追い込まれる、とか、自殺に追い込まれた、という言葉がよく使われる。多分、その表現に間違いはないだろう。頼りない親、頼りにならない教師。沈黙を守る大人社会。そんな背景の下で、気の弱い子供達が余儀なく自殺という行為に陥るのだ。

かつて日本には弄るとか、イビル、という言葉があった。そこには常にイビル側の強者と、いびられる側の弱者が存在していた。だがそれは昔の話であって、今のイジメ問題には固定的な強者も弱者もないようだ。

では、現在のイジメ場面で強者は一体誰になるのか。その答えは難しくない。弱者の一部が集団となり、一時的な強者となつてイジメを始める。ここでは何故、という疑問を無視する。単に見掛け上の現象だけに話を止める。今の日本に芯の強い子供や若者はいない。みんながみんな、弱者ばかりだ。だから、一旦出来た子供の集団が崩れたり壊れた時、イジメていた子供が今度はイジメられる側になつて、新たな子供達の自殺現象が後につづく。

今の文部科学省はどうやら、イジメる側の子供を教育することによつて問題解決に当たろうとしているようだ。しかしそれは、この問題の焦点を外している。

問題は自信を無くした脆弱な親と教師と日本人全体の中に蔓延っている。少なくとも、その事実を直視し、公の共通認識にすることが前提になる。

私は可哀そうだ、という日本人の常套句が嫌いだ。口先の同情など、自殺問題の解決において百害あつて一利なし、と断言出来る。

自殺という行為を選択する時、現在の子供が決断している訳ではない。押し流され、弱々しく溺れて死ぬ姿がそこにある。ただ例外的に、恨み辛きといった感情が高じて起こる激情から、攻撃的な自殺もある程度考えられる。しかしそれもまた、私がここで使う決断、の意味を含まない。

仲間から押し出される。孤独で苦しくなる。他の選択肢を失い、仕方なく自殺に走る。そこには子供達の決断という側面は含まれない。

もし私に幼い子供があり、その子供が急に自殺してしまつたら、すべての責任は親たる私にある。そこを避けて、この問題の解決はない。

子供の自殺事件が起こる度に、校長や担任教師が口にする言葉がある。「私は知りませんでした。子供本人からイジメの話は聞いていません。」

これで弁明が済む、または済ませてしまう社会。私はつくづく貝になりたいたいと思うのだ。

(三) 社会人のへの旅立ち

日本人のすべてが考える決断の不可欠さを痛感するのは、高校または大学を卒業して社会に飛び出す時期かもしれない。私はかつて大学生だったし、その後は大学生と向き合った長い現役時代を過ごしている。そんな私の前に現れた学生達の姿に、この問題の実相を見てきたように思う。

大学三年、まだ余り勉強もしていない学生達の間、一種の緊張が走る。

「お前、就職はどうする？」

という言葉が行き交い、

「俺は四社で面接を受けようと思っっている。それでお前は、……?」

「やあ、俺はまだ就職するつもりもないから、大学院を受けようかな。」

それが大学三年生になった学生達の日常的なやり取り。彼女の話も部活の話も、彼等の主要な会話にならない。

それが彼等の大多数。例外を見つけないことが難しい。しかしそこに、私は疑問を感じる。

大学受験に際して、彼等は自分の将来を考えていなかったのか。もしそうでないにしても、大学の二年間に過ごした中で、何故そんな重大な問題に決断を下していないのか。不可解で、理解に苦しむ。

少し彼等の横顔を覗いてみると、その答えは余り難しい問題でなさそうだ。

「取り敢えず、近くの一流高校に入り、取り敢えず自分の学力に見合った大学に入学する。後はケセラセラ。」

取り敢えずという話に決断は含まれない。大学三年の就職先決定の時期になつて、彼等は慌てているのだ。だが、そこまで決断のすべてから背を向けてきた彼等に、自分の明確な決断を下す意欲も、力も残っていない。

決断には本人の強い意志力が欠かせない。しかし、その年齢まで取り敢えず、取り敢えずということに誤魔化してきた事実は、彼等の将来決定に大きく響く。

ある時、一人の学生が私の研究室を訪れた。

「先生、会社が安定していて給料が高いところ。それに完全週休二日という会社はないでしょうか？」

彼は確かにそう言った。それに対し、私も無造作に答えた覚えがある。

「そんな話は国立大学の教官が真面に受ける相談の範囲外だ。自分で考えろ。」

パソコンやインターネットの普及した今なら、学生からそんな相談も受けないだろう。しかし、二十年から三十年も前に遡れば、この種の話はごく当たり前。腹を立てた私が馬鹿なのか、それとも相手が無知で愚かだったのか。

過去四十数年の大学生活を通じて、私は日本人の若者に対する不可解さがまだ、まだ溶けていない。具体的例は二つある。

「鈴木さん、私大学を止めてすぐ就職しようと思うの。もう大学は止めた。」

「どうして急に、……?」

「だってね、私は高校を受けたときも、大学を受けたときも、親や担任の教師から言われたの。お前は成績がいいから、一流高校に入れ。お前は優秀だからこの大学に入れ、ということよ、……。」

「それで、……?」

「でもそうして年齢を重ねると、大学院に入るべきか、修士課程が終わったら博士課程に進むのかどうか、という問題でもその具体的な意味や内容も考

えず、受験すれば入れる能力があるから入ってしまう訳なの。」

「それでなにが駄目なの？」

「つまりね、私は博士課程の二年でしょ。だから独自の博士論文をどうするか、とあの先生に問われた時、自分の頭の中が空っぽだということがつくづく分かったの。だから私は大学をやめる決断をしたの。可笑しいかなあ、…….?」

この話を黙って聞いていて、私にも素直に頷けることもあつた記憶がある。次に私にとっては最近の話の一つ。今から数えると、もう十余年の昔の話。時期は卒業式当日。

「先生、無事卒業することができました。先生のお陰です。」

「やあ、それは良かったね。ところで今後は、…….?」

「実はですね。私の大好きな母は看護婦なんです。だから小さい時から、私には看護婦になりたいという強い願望がありました。そこで来月から看護学校に通うことにしました。」

「……!?!」

深く考えれば、この彼女の決断に不足はなさそうだ。文句をいう資格も、こちらにはなさそうだ。しかしである。

彼女は私の手元に来たときから、可愛い顔の裏に強い意志の力が感じられた。そして卒業論文のテーマも、論文そのもののまとめ方も、独断即決で終らせてしまった。

しかし、私の専門は動物の社会学とか、動物の心理学あるいは生態学。だから、他の専門領域の先生と肩を並べて卒業論文の審査に当たった時、どれだけ彼女の弁護に苦労したことか、本人は知るまい。

若者達の決断、これは私にとって最も理解出来ない話の一つだ、とつくづく思う。判断の基準点がまったく見えなとも言える訳だ。

(四) 新人種 (ニート)

二一世紀に入った現在、ニートと呼ばれる人々が日本中で見掛けられる。

ニートという言葉の由来は知らない。また、今更知りたくもない。にもかかわらず、ニートを感じさせる若者が確かにいる。同じ若者の中でニートがどのくらいの比率なのか、正確なことは多分、国家にも誰にも分からないだろう。

これは単なる社会批評家の無駄話でない。これを典型というべきかどうか分らないが、取り敢えず我家の例を紹介する。

彼は私の次男。年齢はすでに三五歳を過ぎている。遙かな過去を振り返ると、生れた時から、私はこの子に大声を挙げたことがない。その必要がまっ

たかないほど彼は小さい時から穏やかで大人しい子供だった。

私自身の体力維持や増強のために長距離走に誘うと、小学一年の時から毎日一緒に走った。

最初はまったく弱々しく、もどかしい思いもあった。それが小学三年の或る日、長距離走の途中で後ろを走る父親にこう言った。

「パパ、もつとゆつくり走ろうか？」

確かにその日その時、私は足腰よりも、呼吸が苦しかった。しかしそうだからといって、小学校低学年の子供のいう通りにしたら、自分で自分が許せない。

「よし、一休みしようか。その替わり、あそこからここまでの短距離走で競争しよう。」うん、分かった。」

私はその時、翌年もアスカでオオカミの研究に出掛ける計画があった。年齢もまだ四十代、決して負ける筈もない、と思っていた。

少しの休憩の後、スタートという号令で親子は一緒に走り出した。距離は五百から千メートルくらいだったろうか。最初の内は息子が苦しそうだ。

「よし、これならいける！」

私は迂闊にも、そう信じた。が、全体の四分の三が過ぎた時、私は悟った。もう三年生の息子は喘いでいない。ただ単に、私のスピードに合わせて走っているのだ。

家族一緒のアスカ行から戻った後、小学五年に進んだ息子が部活と関係なく、自発的な少年バレークラブを起こし、仲間と一緒に練習を始めた。

練習が半年、一年と進んだ頃、当初の仲間が遊び出した。その結果、六人バレーの練習さえ、出来ない状態に陥った。

息子は何故か、チームのキャプテンを務めていたが、その混乱に戸惑い、黙って繰り返し涙を流していた。ところが、黙って涙を流す息子を見て、悪ガキ連中が驚いたらしい。やがて、六人バレーチームが復活、札幌市内地方の予選を勝ち抜いた息子たちは函館の全道大会に出場して、第三位の賞状を受け取った。

その息子が中学二年の時、我家に外国の研究者が訪れ、食事をしながら地球環境問題の解決策等について、真面目な難しい話合いをしていた。その晩、来客が帰って行った後、我家の数多い動物を一番可愛がっていたその息子が一言口にした。

「パパ。地球環境問題って、そんなに難しくもないんじゃないの。だってさ、僕達人間みんななくなれば、それで済むじゃないの？」

これには返す言葉もなかった。
「その通りだ。」

と言いたかったが、それを口に出出来ない自分がいた。

その息子は高校に進学しなくてもいい、といいながら、バレエの仲間だった友達の試験結果発表の際には、わざわざその高校に出掛けて、結果を確認してきた。また、三十を過ぎてオートラリアに出掛けた折り、現地の若者の無謀運転で片足機能を失う大怪我した。ところが、現地の警察からも

「アイツから正当な賠償金を取りなさい。いつでも証人に立つよ。」

と言われながら、母親がそれじゃー、というど、

「自宅に余分な金があるなら、裁判は止めてね。」

と言って笑ったという。

小学校時代から高校時代を通じて、その息子は小遣いばかりか、靴も服も自分から欲しい、変えたいと言ったことがなく、定職についたこともないが、車一台買って欲しいということも未だにない。そして三五歳が過ぎた今、彼の唯一熱心なのは、例のバレエ仲間が独身をつづける連中を毎週自宅に招き、好きな料理を作りながら約半日、気持ちよく雑談に耽ることのようなのだ。

さて、如何にも回り道をしてしまったが、私にとつてのニートの原型はこの息子にある。押せば素直に引き、引けばこちらに押しこない。

彼の意識の中に一度も女性の姿はなく、未来については考えず、悩まず、苦しめない。

しかし彼を見ていると、ある日ある時、親の見えないところで一生揺るぎのない決断を下していた、と私には思える。それは普通の若者のように就職だ、結婚だという世界でないが、それでも、人生の方向性を決める確固とした決断を彼はどこかでしていたのだと思う。

チャンスがあつてその息子がある、インドのお坊さんに預けようとしたことがあつた。しかし結局、それは家族の話題の範囲で終ってしまった。

今流行りニートが不可解にして否定仕切れない人々の群にならない群れだと思ふのは私だけだろうか。

(五) 中途退職

私が今住んでいる故郷のニセコ町には過去四半世紀の間に数多くのＩターン移住者がいる。その中には二十代半ばで飛び込んで来る者。定年後にゆつたりと夫婦で移り住む人。それから、四、五十代前半辺りで学齢期に入った子供を伴う一家など、中身は色々。その中で、ここでは三番目に当たる人々について話したい。

このカテゴリーに入る人々の多くは、直前まで現役で働いていた大企業の社員。企業戦士と言い換えることが出来る人々である。

彼等に理由を聞くと、一つはニセコの自然がいい。二つ目の理由は田舎の小規模な学校に子供を通わせたい。そして最後に企業戦士で一生を送るのに

耐えられない、ということのようだ。

私も大学を定年退職してから、最後に授かった幼い娘を伴い、信州の伊那谷の奥地に出掛けた。その理由の一つが小学校に入学の時を迎えた娘に、長い歴史がありながら僻地化が進んで小規模になった小学校へ通わせよう、という思いがあったことは間違いない。だからそこで何故、小規模校か、という説明は必要もないし、改めて問はず気持ちもない。しかし、私は定年退官後、相手は大企業の現役を捨てた人間だから同じ話になり得ない。

確かに、田舎の小規模校での生活は、子供達にとつて魅力があり、不満の声も聴こえない。ただ、年金と無縁な彼等の場合、どうして生活資金を捻出するか、という問題が移住開始と共に問題となる。

なるほど、ニセコという街は今や国際的な観光地として北海道の先頭を走るかに見える。しかし、現在の総人口四千五百の内、半数の間はこの地で生まれ育った人間。その数は私が子供の頃の四分の一に過ぎない、という厳しい現実も無視出来ない。

戦後七十年、この街から六千人以上の人々が去ったという事実には、その背後にそれだけの事情がある、ということの意味する。これも石川啄木の歌だが、

働けど働けど楽にならざり、ただじつと手を見る。

というのがある。それは勿論、企業らしい企業がなく、農業も酪農も林業も、ここではまともな収入に結び付かなかったという、厳然たる事情があったからに他ならない。

では中年のサラリーマンが子供を抱えてこの街に移住した場合、必要な収入を一体どうして手に入れるのか。これはまさに、避けて通れない話である。

私は敢えて、決断という言葉が好きだ。そして大企業を自分から捨ててニセコに移住した彼等の決断を評価してやりたいのが本音である。だが、折角こんな土地に来て、間もなく生活資金の欠乏でどこかに退散、というのも戴けない。

彼等の多くはまともな大学を出ている。大企業の第一線にいたわけだから、ある程度の知識や技術も持っている。しかしそれは大企業の求める知識や技術であって、田舎の価値では概ね役に立たない。

田舎町の中心部に位置する我家にはそんな人間が何人か通ってくる。ある者はパソコンのプロ技術を生かし、観光開発に勤しむ外国人相手に、それなりの生活をしている。また別な男は親の支援を受け、ささやかな収入で暮らしている。しかし第三の男には、どうしても家族を支える収入が見当たらない。

日々移り変わるインターネットや、都会に毎月ばら撒かれる雑誌の多くに、田舎暮らし推奨の無責任な話が出てくる。しかし、田舎も現実には元々厳しい。

大企業での年俸一千万とか一千五百万という数字に比べ、田舎の収入は年間二百万だって珍しくない。

現代の企業は事前の情報収集に時間を割くという。それはまた、こうした四、五十代の人々の決断にも、欠かすことのない前提になる筈だ。

年寄ばかりの田舎暮らしはやり切れない。次の時代を考えている話し相手も欲しいし、広く今の世界を見据えた会話もしてみたい。だから、中年の移住者を迎えることに、こちらから否定する理由は見当たらない。しかし、そんな人々とその家族が、虚しく田舎を去る姿も見たくない。

私という人間にとって、ニセコという田舎の故郷では、黙っていても充実した時間が過ごせる。しかし子育てや老後の話になると、簡単にそうはいかない。

きっぱりとした決断は歓迎する。ただしその前に、田舎で暮らす術をよくよく考えて欲しいものだ。

ニセコのような田舎は、いつも遠景が楽しめる。朝焼けも夕焼けも実に素晴らしい。デジタルのカメラがあれば、いつでもどこでもシャッターを押したくなる。でもしかし、大事な決断の前に都会生活における真実の姿もしつかりと見詰めておいてもらい、田舎についても多面的な情報収集を忘れないで欲しい、

十一月一日、初雪の次に明後日から雪の到来が気象庁から伝えられている。それが普通のニセコなのだ。しかもやがて大雪の季節がくる。その時、毎日のようにつづけなければならぬ除雪作業に、貴男は耐えられるだろうか。ふと、余計なことを考える。

(六) 結婚問題と少子化

二十一世紀の現在、日本国内では少子高齢化問題が叫ばれ、政府は産めよ、増やせよと叫んでいる。確かに、毎年の出生数が死亡数を上回る今日、このままでは日本という国家が衰退もしくは消滅に向かう危険性も考えられる。

理想的な国家の人口構成はピラミッド。しかし今は、円筒形から逆ピラミッド型へ向かう可能性も無視出来ない。

ただ、出産の前には結婚という問題がある。結婚したいか、したくないか。すべきか、すべきでないか。そこに国家が介入する余地はない。

長年、上昇がつづいた国家公務員の収入。それが最近、減給の方向に動いている。これには些か驚きを覚える。また一方、これは絶対大丈夫と言われた大企業や成長企業でも突然、人員削減の話が持ち上がる。従業員二千人、三千人といった地方の大工場も、容赦なく閉鎖に追い込まれる。

これに関連して考えるべきことが他にも二つある。一つは積極的に生きる

ことを放棄してしまっているかに見えるニートの問題。次には男性と女性双方における中性化の問題である。ここでは主にこの中性化について考えてみたい。

今から四十年ほど前、私の大学ではまず男子の中性化が目立ち始めた。荒々しく身体を動かす部活、つまりラグビーや山岳部が衰退の一途を辿り、替わって〇〇同好会という遊びのグループがどんどん出てきた。

男子の間で、口角泡を飛ばす、というような激しい議論が消え失せ、殴り合いの喧嘩もほぼ完全に消えていった。学生運動も当然大学構内の片隅に追いやられ、友人同士の固い結び付も影を潜めた。

それからほぼ五年後、いい意味で女らしく着飾る女子学生の姿に顕著な変化が現れた。明るい色の服装も、少し高めのヒール靴を履く姿も消え、テニス靴や各種各様のスニーカーばかり履く傾向が目立ち始めた。

「あのね、〇〇君。ノート貸してよ。期末試験が近いから。」

「オーケー、〇〇子。俺のノートでよければいいよ。」

つまり、話はこういうこと。大人しい男子は素直に毎日授業を受け、女性解放の波に乗った女子学生が、頻繁に大学を離れ、自由に遊び回っている訳だ。

その時代、男性の中性化（草食系化）が先行し、女性の中性化（肉食系？）を引き出してしまった、と私は考える。しかし、男子が男の魅力を失い、女子も男性を特別な相手と見なくなればどうなるか。

それから間もなく、私は女子一名を含む総勢六名の学生達とフィールドワークに出掛けた。ところが行った先の民宿のようなところで泊まる場所が六畳で、合計四部屋しかなく、私は教師の特権（？）を生かし、まず一部屋を占拠することにした。その時、頭にあつたのは、

―学生達は多分、男子が五名で二部屋、残りが女子専用的一部屋。―

という見込みだった。ところが、古い男の考えに逆らい、学生達の間で議論が始まった。

「あのさ、部屋割りのことみんなどうする？」

「どうするって、当たり前じゃないか。俺達は六人で部屋が三つだろ。三、二、一ということはないよ。」

「あら、私ならいいわよ。二、二、二でいきましょうよ。」

「おお、それでいいか。なら、話も簡単だ。じゃ、誰が彼女と一緒に部屋になる？」

「私は〇〇君がいいな。おしゃべりの相手をしてくれるから。」

「オイ、冗談は顔だけにしてくれ。俺は明日からのことがあるから、女の相手などしていられないよ。」

それから先、学生達の話し合いがしばらくつづく。俺は嫌だという男子が

次々に現れ、どうしても話し合いがまとまらない。

私の眼から見ると、彼女は小柄で色白、目もパツチリして女の子あるいは女学生としての魅力も十分ある。しかし、本音の真剣な話し合いになかなか決着がつかない。

結局、女の子と部屋を一緒にさせられたのは一番気の弱そうなM君。彼がその時、貧乏くじを引いたということになったようだ。

政府や国家は現在から将来へ及ぶ老人介護問題や財政面の困窮（年金の財源不足）問題が念頭にある。しかし、結婚も出産も個人の問題。社会の安定性が崩れ、企業の存立不安が慢性化する現在、産めよ増やせよ、という話はどこか本質を外れている。

結婚式の翌日、あるいはハネムーンの中、若者達は無造作に離婚の手続きを始める。結婚してもセックス抜き、子供は産まない、という約束の下での結婚も数多く見掛けられる。

かつて、誰と結婚して一生を送るか、ということは真面目な問題だったし、真剣な決断の要する話だった。だが、何事も決断を下すことに躊躇する今の若者達に、結婚して子供をつくれということは、馬の耳に念仏、という様相を示しているように思う。

必要だ、そうすべきだ、という話は誰にでも出来る。田舎の片隅に住んでいても、国家や政府の叫び声は虚しく聞こえる。晩秋の十一月初旬、北海道では初雪から根雪の話が耳に届く。

（七） 定年退職

サラリーマンをつづけるすべての人に、やがて定年退職の時期がやってくる。三月末の退職式、四月になれば、自由気ままな人生が始まるという訳だ。

これは確かに、喜ばしいこと。早朝出勤も深夜帰宅もなくなるのだから、そこから解放の日々が始まるのも当然だろう。しかし、そうした解放の日々から一カ月余り、ゴールデンウィークが終わる頃から、退職者の胸に新たな当惑の日々が始まるのではなからうか。

終日生まれた自由の中で、最初に気付くのは過去のサラリーマン時代の真相。

—自分のサラリーマン人生は沢山の鎖や分厚い壁の中で終ってしまったような気がする。自分は自分なり、積極的に生きてきたつもりだが、よく考えると、奴隷身分の人間とどこか違いがあったらうか、……？—

—そんな気分が腹の底から湧いてくる。あるいはまた、こうした風にも考えられる。

—あの会社は俺が支えたんだ。多分、現職の連中はそれを覚えているさ。—

しかし、それはどうも違うようだ。その証拠に、ふと思い出して元の会社に顔を出してみるがいい。そして玄関口の案内嬢に、笑い掛けてみるがいい。

「〇〇部の〇〇課長に会いたいんだが。」

すると、通り一辺の言葉が聞ける筈だ。

「貴方様はどちら様ですか？」

「僕は元部長の〇〇だが。」

「事前のアポイントはお取りでしょうか？」

「いや、そんなことはしていない。」

「申し訳ありません。それでは〇〇課長にお繋できません。」

「どうして、私は先月まで部長だった〇〇だよ？」

「決まりは決まりで御座います。どうか、お帰り下さい。」

これは作り話ではない。私の学生時代の友人で、某大商社を退職した男に起こった間違いない現実の話なのだ。

これを私に話してくれた本人が最後にこう言い残した。

「あのな、会社なんか冷たいものだよ。本当に、……。」

退職した社員に会社が非常識な冷たさを見せるのかどうか、それはまあ、さておくとしよう。それより、人間と会社という本質的な関係をまず考えよう。

日々の収益を最優先される会社にとって、最初から人間は人材。しかも、常に代替え可能な存在として位置付けられている。その人間の人生とか家族に見掛け上気を配るのは、会社存続のための方便に過ぎない。だとしたら、会社を定年退職した人間を受付嬢が邪険にしたところで、文句をいう方が違っていないか。

が、その場に当面した時、退職者はやり切れない。怒りが浮かぶ、動揺も隠せない。

―では一体、四十年にもなりそうな自分のサラリーマン人生はなんだったのか。自分は馬鹿だったのか、愚かだったのか？―

ここではそんな反省を止めよう。反省だけならサルもするようだし、出るのは溜息ばかりな筈だ。

自分が反省する替わりに、奥さんと成長した子供達に聞くがいい。お父さんの人生は家族にとって一体なんだったのかと、……。多分、急な質問に戸惑った家族はまずいうだろう。

「お父さんはよく頑張ってくれましたよ。」

だが、それは思考の定まらない一瞬の外交辞令。そして聞かれる次の言葉こそ、現役時代の貴方の実相を捉えた言葉になる筈だ。

「そうねえ、帰宅と同時にお父さんは疲れた、疲れたばかりだったから、私

達樂しい人生だったとは言えませんがね。もつと他の人生が私達にもあるんじゃないかと、よく娘達と話していたことがありますねえ、・・・・・・・・。」

そう、それが家族みんなの本音なのです。ただ、その本音の言葉に怒り狂ってはいけません。そこでこそ、自分のサラリーマン人生を深く広く考えるべきなのです。

それはともかく、これからは自由になった自分の余生をどうするか、どう生きるのが問題なのです。

すべての人間にとって、自由は素晴らしい魅力のある言葉。ただし、そこには常に孤立と孤独が付きまとい、パソコンに指令を出すのとは違う、面倒な話が伴うもの、と私は思う。

定年退職に企業年金、公務員なら共済年金。最近のマスコミからはそんな言葉ばかりが聞こえてくる。しかし、マスコミは常に無責任。自分の余生は妻と一緒にあって、よくよく考えなければいけない。ただし、これは長年連れ添ったと思っている奥さんから、離婚話が出ない男に限った話である。

(八) 第二の人生設計

最近、我が国の年金財源事情から、日本全体の退職年齢を六十歳から六五歳に引き上げようという話がある。その背景には勿論、国民年金の支給時期の繰り下げがあり、さらにその背後に慢性的な国家の財源不足、という問題がある。

いずれにしても、平均寿命が延びる現在、人々はある時から第二、第三の人生設計が必要になる。この問題を現役の終了前後のサラリーマンに限って話したい。

先に、定年退職直後の問題について言及したが、この問題は前向きに第二の人生を設計する際の問題を考えることにある。

現役時代の後半から、すべての人がある程度の資金と自由な時間の使い方について考えるだろう。ここでは都会で生まれ育った人を取り敢えず除外することにする。

定年間近の人は次の人生を考える際。まず関連する雑誌を幅広く買い集めるかもしれない。また、インターネットで関連情報を手軽に集める方法もある。そして生まれ育った時代の記憶に惹かれながら、田舎暮らしの世界をそこに見出すかもしれない。ただし、手軽に集められる情報や知識には落とし穴がある。

多くの老いを自覚し始めたサラリーマンにとって、都会の喧騒もスピード

も煩わしい。疲れるし、目前の溢れる群衆の威圧感に怯えを感じないようにしているかもしれない。

そうだとすれば、まず考えられるのは、風景の美しい田舎暮らし。ゆつくりのんびり、人にも猛スピードで走る車からも解放された世界。小鳥の声や姿に心を動かし、遠くを走るシカやキツネに歓声を挙げる日々。確かに、手軽な情報世界からはそんな夢のような情景が浮かび上がる。

しかし、そこでまず考えて欲しい。年齢からくる時間的制限の問題だ。六十歳を基点にするなら、定年後の第二の人生に許されるのは十五年から二十年。適切な老後の介護を考え、医療の側面を考慮すれば、その先の田舎暮らしなど考えられない。

また現役時代から自然エネルギーとか自然循環資源活用の問題に関心を持っていた人には、自分だけの広い土地と気に入った住宅建設も夢だろう。だがそのすべてを業者に任せてしまうと、その後には不満が残る筈だ。だからといって、自分ですべてをやるとなると、己に不足していることが次々出てくる。

取得する土地の登記、水源と排水設備、建築材料の収集と保管。それに一旦、自分の手で住宅を建設するとなれば、今迄身に着けたサラリーマンの知識や経験など、ほとんどなんの役にも立たないという現実的問題に直面する。が、そこで立ち止まっては困る。方法はまだある。インターネットのホームページからまず、すでに先行して田舎暮らしを始めた人々の言葉に耳を傾ける。それから現地を訪問し、ご迷惑でなければ、一週間でも一カ月でも体験学習の機会を持つがいい。その時、ただ相手の姿を見守っているだけでは意味がない。一緒に汗を流し、現場の隠れた難しさと、本音の言葉を聞くがいい。どこに問題があり、それをどう克服したのか、具体的に聞く必要があるのだ。

昨年（二〇一三年）の夏、田舎暮らしの体験学習が毎年出来る組織を私の故郷のニセコで作ったら魅力があるか、と東京人に聞いてみた。その答えは、「是非頼みます。仲間や後輩にも連絡しますから、希望者は途切れないと思います。で、そこでは実際に何を学ぶんですか？」

という言葉だった。

一日は二四時間、一年は三六五日。春夏秋冬という季節変化があることも忘れられては困る。田舎で暮らすということは自然の摂理に従い、自然からの恵みを最大限利用出来る知識と能力が欠かせない。私達は今、すでにＩＴで先住している人々の英知を集め、そのすべてを一年間の現地体験学習で学んで欲しいと思っている。

日々汗を流し、中型や大型の犬と夕焼けを眺める日々は長寿に繋がる。決して焦ることはなく、決して苛立つことのない世界が田舎にはある。だから、

どうぞおいで下さいと言いつ切れ。ただし、ここに挙げた諸々の注意事項を忠実に守って、田舎暮らしを始めて欲しい、と私は思う。

(九) 社会淘汰

サラリーマンが定年退職する時、第二の人生の場を求めて都会から田舎へ移ろうと決断する。その前に幾つか普段気付くことのない問題に心を向けて欲しいと私は思う。その一つが僻地社会の慢性的に抱える苦悩という問題である。

ここから思考の世界を大きく広げる。

まず考えるべきは、日本の各地に点在する町村で何故、過疎化が起こるか。起こって来たか、という問題だ。

一八五九年、かのC・ダーウインが進化論を発表した。その中でダーウインは適者生存という見新しい言葉を使い、自然淘汰という言葉 키워ワードにしている。

博物学者ダーウインは人間ではなく、自然界全体、特に後日ダーウインフインチと呼ばれるようになったガラパゴス諸島の小鳥の多様性に注目していた。

その原著・種の起源を読むと、彼ダーウインは真に真摯な生物学者であることに驚く。彼はその著書を通して、一度たりとも人間について言及していない。

にもかかわらず、軽薄な当時の人の一部がそれをキリスト教の神の言葉(旧約聖書)を冒瀆するものと決めつけ、この世から消滅させる運動を起している。

確か一八七二年、ダーウインはそうしたキリスト教会からの攻撃を受けて、謙虚かつ冷静な反撃行動に移る。彼はその年に人間と動物の表情という書物を著わし、消極的ながら、人間と動物には一貫した共通点があると主張したので。

本人の謙虚さにかかわらず、産業革命に湧く当時の企業家と資本家の多くがダーウインの主張を大幅に拡大し、社会淘汰という新たな言葉を生み出し、社会的な弱者が強者に負けるのは自然の摂理だ、という話にしてしまった。

生物学者の間でダーウインの進化論は未だに議論の余地を残している。が、二一世紀を迎えた現代でも、ダーウインの進化論には安定した地位が与えられていない。

その反面、経済力優先が叫ばれ始めた時代の流れに勝手な正当性を与えようとした社会淘汰理論は、今や現実社会の実態、実績において堂々と君臨している。

さてこの二つの概念に含まれる淘汰という言葉に関連して後日、人為淘汰という言葉、もしくは事実・現実が二十世紀初頭から現れる。つまり、今の表現でいえば、育種学とか品種改良の話である。

ダーウインの自然淘汰は気の遠くなるほど長い時間の間に、適者生存の原則・原理に従い、ゆつくりと進化しつづける、ということになる。しかし、この自然淘汰による変化を人的に加速化させ、もつと早く、もつと人間に都合のよいもの作り出せないか。もつと速く走る競走馬や、もつと金になる作物が出来ないか、というような人間の欲望に沿う方法や手段をまとめて人為淘汰という。

現代の社会で、この人為淘汰による成果は社会の隅々にゆき渡る。競走馬しかり、果物や野菜の品種改良またしかりだ。しかもそうした人為淘汰の陰で社会淘汰の話が浮かび上がる。

巨大な利益を集める大会社や大企業の本部・本社は大都市にある。だからそこには大金が蓄えられ、多くの人々を惹きつける。だが、企業や会社が求める人材の数には制限があり、そこに社会淘汰の力が働く。

知能・気力・体力、さらに男子の体格や女性の美しさも人々の差別化に働き、都会には商品価値の高い者、田舎にはそこで切り捨てられた弱者が定着する。よいか悪いか、正しいか間違っているか。そんなことなど、現実社会は問題にした。金の力は絶対。選ばれ側に選択権はまったくない。

その結果、都会に住む人間同士の結婚ではさらに商品価値の高い子供が生まれ、田舎では本来、商品価値の低いとして切り捨てられかねない子供供達であふれることになる。

これが一つ二つの世代で終るならまだ救いがある。しかし、現実を見れば分かるように、それが三代、五代とつづけば、地方や僻地社会に救いはない。この流れ、この現象や事実を社会淘汰現象という。

政治家や政府関係者はこの事実を知らながら公の場で言葉にしない。しかし、この事実・現実を無視して地方再生とか地方創生という話は語れない。

果物や野菜なら、品種改良で余された作物は無造作に捨てられる。だが、人間社会の一部である地方や僻地は、都会が切り捨てた人間の集団だけで構成された社会になる。とすれば、独自の努力で地方や僻地が光ある再生や創生の道を進めない。たとえ、国家が一時的な資金を投資したところで、必要な人材に欠ける地方にその潜在力など期待出来ないのだ。

それでも、定年退職後のサラリーマンの方々には田舎で第二の人生を目指して欲しい。ただし、貴方がそこで期待すべきはただ、無駄にのんびり暮らす楽天地の生活ではない。残された人生で、人間が人間らしく豊かな心で暮らせる田舎社会を他の人々と協力して自ら再生・創生させることを考えて欲しいのだ。

これは誰かに押し付けられた時間ではない。サラリーマン時代とそこが根本的に違う。自分で構想を練り、現地の行政や住民を説得して、人間本来の事業に従事することだ。

生活資金調達のための虚しい努力の世界ではない。自分の努力した結果が田舎なら自分の眼で確認出来る。しかも、その成果や結果を心から喜んでくれる人々が目の前にいる。これこそ、人間の至福の時間といえるのではないだろうか。

貴男は必要とされている。そして貴方は僻地の田舎生活で、人間本来の姿に立ち戻ることが出来る。

(十) 夫婦生活

都会におけるサラリーマンの生活は歪んでいる。一日の大半は会社勤務に縛られ、家には寝に帰る。夕食も家族一緒にならないし、夫婦の会話も限られる。事務的な話だけがすべてになる。忙しい、疲れたという理由がすべてを決める。

かつて私の弟子だった多くの学生達の中には、すでに五十代を迎えた者がいる。彼等が二十歳かそこらで私の前に現れた時、脅かされることが一つある。―この若者達に、父親の臭いが無い。どれもこれも、母親の臭いばかりだ。これは何故か、……?―

不思議だった。不可解だった。そこで彼等に質問してみた。

「君達のお父さんは毎日どんな生活をしている?」
するとこんな話が帰ってきた。

「親父ですか、そうですね。夜遅くに帰ってきて、翌朝早く、僕達子供より早く会社に出掛けます。それにたまにある休日だって、ゴルフだとか釣りだといって、会社の連中と出掛けましたね。だから、僕等家族にとつて存在感の薄い人でしたね。」

そうか、そうだろう。だから学生達の姿に父親の影すら見えないのも当たり前なのだ。

しかし、そんな家庭状況でサラリーマン夫婦が四十年近く暮らせばどうなる。日々つづく内容の希薄な夫婦生活など、何十年経とうと深みのある、あるいは特別に興味のある関係は生まれ無い。

二人の間には子供いる。子供は健康に育ち、今や社会人直前の大学生になっている。だがそこに、唯一の絆を求めるのは儚すぎる。子供は何人いても夫婦の元を離れていく。そして最後に、夫婦だけの世界が残る。しかしそこに共通の話題もなく、男女の接点も乏しいとしたら、後の夫婦生活はどうなるのか。

その点、第二の人生で田舎生活を選ぶと、肝心の時間は夫婦二人だけの世界。朝も晩もすぐ隣に相手がいいて、気持ち良い会話が交わせなければ、二人は各々孤独な日々の生活に追い込まれる。それでは田舎生活もつづかず、意味もない。

ここで定年間近に迫った夫婦にいいたい。もっと互いに相手の存在に感謝し、味わいのある日々を送って欲しい。それをしつかり土台にして、第二の人生に進んで欲しいと心から願わずにはいられない。

(十一) 男女不平等論

夫婦生活について発言したのにつづき、古くて新しい男女平等論にも言及してみたい。話が本題から外れるという危惧もないではないが、どこかで必ず結び付く、という余り責任の取れない考えもあるので、今一寸だけ時間を貸して戴きたい。

政府は今、女性権の確立とか拡大という問題に取り組んでいるようだ。これには正直なところ、不本意な想いが次々に重なる。

三十歳から始まった後半の人生でつづけた私の研究において、対象はニホンザル・キタキツネ・アラスカのオオカミに、ロシア領ベーリング海のトド等は典型的な野生動物。各々、地球上の大自然で自立して生きる動物だった。

小集団から始まり、大きな社会を構成して生きる彼等の生活から、今日いわれるところの男女平等論は出てこない。何故なら、野生もしくは自然に生きる彼等の間に、牝牝の相違も顕著にあるが、それは決して、互いに乗り越えることの出来ない役割上の違いを意味する。

生活空間でいえば、牝は牝の三倍から五倍。体力や身を守る攻撃・防衛力の上でも、牝と牝では比較にならない。自己体験の研究ではないが、白クマのすべてと、北海道にいるヒグマの牝の一部には牝と違い、冬眠の習性がなしいといわれる。

下北半島のニホンザルでは四、五歳以上の牝ザルの多くが群れを離れ、試練の旅に出掛ける。またその点では、アラスカオオカミの世界でも性的な成熟を迎える牝が群れを離れ、もしくは群れを追放されて困難な一人旅にかけていく。しかし、牝の多くは一生、同じ群れに留まるのが習性である。

子育てにおいて、分かり切ったことだが、出産は牝の特許。牝が子供を産むことなどありえない。その上、出産する巣穴に、牝の許可なく牝は勝手に出入り出来ない、という習性もある。

六月初旬から七月に至る繁殖期のトドでいえば、ハーレムと呼ばれる世界が実際あるかのようにいわれる。人間の男共が涎を流す話だ。しかし、それは実態を知らない無知な人間の戯言。

確かに、北の辺境の地の狭い海岸でぼんやり眺めていると、巨大な牝が自分のテリトリーに多くの牝を囲い、暴君のように君臨しているかのように見える。しかし、研究者が克明に観察すると、話はまったく別の方向に向いているのが分かる。

牝を自分のテリトリーに止めようとするとき、トドの牝は賢明に頭を下げて頼んでいる。

―頼む、是非ここに居てくれよ。―
そんな牝の悲鳴も聞こえてくる。

繁殖地に牝は一カ月前に上陸し、各自のテリトリーを獲得する。だが、彼等の世界に法律はないから、その場所を離れることが出来ない。だから、二カ月間の繁殖期間、牝は飢えに耐えながらも食事をしない。一方、牝は違う。

出産を間近に、牝の上陸が始まる。上陸後間もなく(二、三日以内)、牝は一頭の子供を産む。体重は通常二十キロ。稀に三十キロで産まれる者もあり、彼等はスパーベビーと呼ばれる。

出産後一週間、牝は集団でテリトリーを離れ、一斉に外洋へ向かう。時刻はおおよそ午後の八時。誰か一頭の掛け声に合わせ、二、三十頭の牝が狩猟にでかける。やれやれというように、あるいは久し振りに美味しい餌が食べられる、というように。

それでも、自分のテリトリーを守ろうとする牝達は内陸に留まる。その周囲に人間でいえば二、三歳に相当する幼い子供達が遊び暮らす。あるときは子供同士、またあるときは牝の背中の上で。

そんな様子を崖の上から観察していると、頭に浮かぶ姿が。保育園や幼稚園の子供達と男の園長さんの姿だ。しかもそんな牝の身体を丹念に観察すると、上半身に生々しい傷が幾つも見える。

こうして見てくると、人間世界の男女不平等論も平等論も意味が分からない。男と女を牝と牝に言い換えれば、双方は生物学的に異質な存在であり、社会的にも、決して相重なるような存在ではない。

二つの異質な存在に、平等とか不平等の話を持ち込むこと自体、私は理解出来ない。二つは相異なる二つの存在としてこの世界を形作る。そのどこに、こんな議論が介入するのか。

戦後の日本でも個人主義が当然のこととして叫ばれた時期がある。

一人の子供の命は地球よりも尊く、重いものだ。

といった社会評論家も確かにでてきた。その上悪いことに、二十世紀末には「利己的遺伝子」というタイトルの本で、一般社会ばかりか専門家まで騙され、個人主義の風潮に学問的な基礎がある、かのような混乱にも陥った。

が、自然界の野生に身を置いて研究してきた私は断固叫びたい。

男女不平等論や男性優位主義を唱える前に、牡は牡らしく責任を全うせよ。また牝の方も、子供を産み育てる自然の厳然とし摂理に基づく女性だけの権利について、もつと深く考え認識せよと。

北海道の片田舎、ニセコ町の片隅で私は今この文章を書いている。時期は十一月の初旬。時ならぬ暴風雪が窓を叩き、急に降ってきた雪が地面の至る所に広がる。この秋、私の眼を楽しませてきた小菊の大きな株が、そんな暴風雪に逆らい、まだ頑張っているのが切ない。

(十二) 歴史・文明・人間

二十代、私は大学の文学部で実験心理学を学び、しばらくそこで長い助手時代を迎えた。そして三十年後、定年前の五年間、同じ大学の先端科学研究所に身を置き、動物環境学という学問に現役最後の時間を費やした。

一方、私は二十代で確実性の探求という北欧の本を読み、四十代半ばに不確実性の時代という経済学者の著作を、さらに五十代の終わり近く、文明の衝突という衝撃的な本にも出合った。

これら強いインパクトを受けた三つの著書を含めて、ここでは人間と歴史・文明について考えてみたい。

現代に繋がる人間の歴史がいつ始まったのかは分からない。がしかし、文字を使いだした時代を基点にしても、人類にはすでに四千から五千年の歴史がある。

怪しげな古代の話を除き、その中には人間の歴史を自分の意志と力で変えようとした人物が思い浮かぶ。かつてのナポレオン、信長に秀吉、近くはヒットラー。ところが実際の話、彼等は成功しなかった。途中で挫折し、不遇な姿で人生を終えている。

今現在、そうした英雄のような人物は見当たらない。その替わり、各国家で政権を握る人物が国家の陰に隠れ、やはり同じことを考えているようだ。

ここで話は小さくなる。現在の日本国内の話だ。

政府の名の下に権力の中核にいる人物は次々に構想を打ち出す。その具体的な形やまやかしの正当性を求めて、無数の審議会を作りつづける。困ったことに、定見や良心のない学者・評論家の多くが、オーダーメイドの回答書をいとも簡単に提出する。

憲法改正案や教育制度の改正案。あるいは新農業政策に、原発導入案。それに加えて医療制度の改革案や国民保険制度の改革案とくれば、多くの国民が欠伸をしながらそっぽを向く。それでも、与党や政府関係者の動きは止まらない。

私はふと、そこで考える。大なり小なり、それらは日本という国の歴史に人間が一石を投じ、方向（歴史の流れ）を変えようとする試みの一つに違いない。では果たして、我々人間は己の歴史に関与出来るのだろうか。

人間がいなければ歴史も生まれない。これは疑いのない事実であり、現実だ。だから、人間は歴史というものの中核を占めている、という見方にも反論の余地はない。

だが、我々人間が仮に歴史上の主役だとしても、それを根拠に人間が歴史を支配している、と断定するのは早過ぎる。映画、舞台劇、そしてテレビドラマ。そのどれをとっても、主役の陰に演出家があり、その前に原作者の作家もいればスポンサーもいる。つまり主役は、背後からの大きな力により操られ、踊らされているに過ぎないのだ。私はこの事実に関係なく人間の間接関係を重ねる。歴史は人間の意志に関係なく独自の運動をつづける。そこでは我々主役であるはず人間もダミーに過ぎない。

これと同じことは文明についても言える。まさに文明こそ人間の特許だと思ふ人が無数にいる。しかし研究者は、現代文明を支える先端科学や先端医学分野の舞台裏で、目に見えない競争相手と日夜夢中になつて戦いつづけるだけなのだ。その日々は言語に絶する。

一年に唯一つだけある年末年始。そんな時でも、先端科学の研究者は自分の研究室に留まる。寝袋や簡易ベッドで仮睡し、インスタント食品で一日三度の食事を済ます。

研究に費やす時間は十六時間、顔が強張り、目が吊り上がったままの生活を三百六五日つづけているのだ。その間、彼等は科学の意味も、斬新な科学研究の成果が人間社会に与える負の部分の影響など、頭の片隅にもない。科学の世界全体は冷静沈着な船長のいないマンモスタンカー。しかも、その行き先さえ誰も知らないとしたらどうなるか。

京都大学の中山教授をリーダーとするIPS細胞の研究。その成果が間もなく臨床試験に回され二、三年以内に実用化されるという。これはまさに、秦の始皇帝が望んだ不老不死の世界に通ずる。

しかし、考えて欲しい。もし現在生きている人間から死の危惧が奪われるとしたら、次の世代や孫の世代はどうする。中年ばかりの人間だけしかいない人間社会とはなにを意味するのか。

多分、その世界こそ、他の動物と違う人間の、人間のための特別な世界ということになる筈だ。でもそれが、我々人間自身が望む歴史の発展した姿なのか。

歴史と同じく、私はこうした途方もない科学技術発展の中に、人間の愚かさ、文明の怖さを覚えてしまう。主役が不在なのではない。正確な歴史認識の欠如と、プロデューサー（統括責任者）不在という厳しい現実に怯える

のだ。そして最後に、我々人間が己の文明を制御出来るのか、と問うてしま
う。
かつて、一度も成功したことのない文明の制御。何故今、それが誰の手に
よって出来るというのか。そこにもつと、政治家や国家権力に直結しない人々
の出番がある。

科学は自らの方法論で己を縛る。だから、科学といえども、割り込めない
世界が幾らでもある。科学者は万能でない。科学という研究領域も万能でな
い。

(十三) 地球環境の破壊と汚染

この本のタイトルからすると、ここで論じようとする地球環境問題には
いささか奇異な感じが伴うだろう。だが、第二の人生で田舎に行こうと都会
で暮らそうと、大地と水と空気に関わる地球環境問題の流れを無視すること
は出来ない。

元々、私は自分の掲げた個人的な目的に向かつて野生動物の研究を始めた。
しかし、一旦始めてしまうと、次から次と現実的に環境問題と向き合う形と
なった。

まず、下北のニホンザル研究では今から三五年に遡り、原発建設の生々し
い世界に巻き込まれた。しかも、その下北研究からしばらく身を隠そうとし
たとき、苦渋の決断を要した。

次に愛弟子達と網走の能取岬で始めたキタキツネの研究では大韓航空機撃
墜事件の騒動に巻き込まれた。撃墜現場はカムチャツカ半島沖。能取岬まで
の距離でいうなら、二千キロも離れている。だが、その余波は間違いなくあ
った。

オホーツク海とアリューシャン列島を洗う北太平洋は海流の面で網走の能
取岬に繋がっている。そのため、撃墜事件後一、二カ月、まさに私達の目の
前にあるオホーツク海沿岸に、そのしわ寄せがやってきたのだ。

確かそれは、夏休みの話だったと思う。ある日、静まり返っていた眼下の
海岸が騒がしい。よく見ると、そこら一帯に人間の動き回る姿が見える。当
初、その理由は分からない。どこの誰が動いているのか分からない。しかし、
網走の街に出て新聞を広げると、そこに原因と理由が書いてあった。

キタキツネの子育てでは出産から終了まで数えても四カ月。その上、私達が
相手とするキツネの巣穴は海岸からほぼ垂直に二、三十メートル。となれば、
海岸線の騒ぎが長くつづくようなら、キツネの子育てにも混乱が起きる。そ
うなると、自然な子育てを学生達に観察させようという私の思惑は崩れる。

結局、その年に能取岬でやる予定は途中で切り上げた。そして思った。

—地球は繋がっていて狭いものだと。—

さてアラスカのオオカミ研究ではもっと大規模な変動を二つ目撃した。一つはカリブー（野生のトナカイ）の大きな一群（推定百万頭）が二十世紀の百年間に数パーセントまで減少していたこと。もう一つはアラスカの至るところにある氷河がすべて、この百年間に絶え間なく衰退の一途を辿っていることだ、

アンカレッジから南東に約六十キロ。アリエスカというスキー場の近くに、一つの氷河がある。その氷河にはすでに氷を失った海岸地帯から山奥に向かい、幾つもの標識が立っている。あるものは一九一〇年、次が一九三十年だったか。いずれにしても、その時に氷河の先端部分には一九八〇年と書いてあったような気がする。

ところで、その標識に沿って海岸から氷河の先端に向かって、急激に植物相が変わるのが一目瞭然としている。一番手前がスプールの低木。次にネコヤナギとスプールの混在するところ。さらにその先は地衣類（コケ類）で、氷河の最先端部分に近い場所はただ、ただ大小のガレキばかり。この景観や姿こそ、今世界中で問題とされる地球温暖化の経緯を示す明確な指標ではないか。

アラスカではもう一つ、地球環境汚染の現実を示す話がある。

六月、大地の雪が解け出すのに合わせて、地表にコケの仲間が顔を出す。カリブーはその中から白くて硬めのコケ（学名も一般名も記憶にない）を主食にしていると聞いたが、その成長速度を聞いて驚いた。一年に〇・五ミリ、十年で五ミリ。だから百年経っても五センチしか伸びないのだという。

それを教えてくれた狩猟管理局の生物屋さんが、私の耳元で囁いてくれた。「あのねえ、鈴木さん。ここら一帯のカリブーはあのコケを主食にしていたから、この百年間で急激に数を減らしたという話があるんだよ。まだ確証も掴めていないけどね、……。」

日本でも大気汚染の話はよく聞く。その汚染は風に乗って地球規模で散り、やがて遠くアラスカの大地まで汚染しつづける。そして最後は大量にカリブーがその汚染物質を食事の中で取り込んでしまう。発生源を日本や中国大陸だとすると、アラスカの辺境までならどのくらいあるのか。多分、四千キロから五千キロはあるだろう。とすれば、人間が日々普通に暮らしているだけで、私達はあの白亜の大地に生きるカリブーの数にまで、直接もしくは間接的に影響を与えていることになる。

これは恐ろしいことだ。悲しいし、虚しささえ感じてしまう。でも、こうした厳しい現実に関心をもち、目をそむけることは出来ないし、してはいけない筈だと私は思う。

(十四) 国連と日本

昭和の二十年代、吉田茂首相の下で、戦後の日本も国連加盟に成功した。その国連には今、三百数十の国々が加わり、世界で唯一つの包括的な協議機関となっている。

拒否権という特別権限を持つ常任主要理事国が六カ国。その国々は賛成三百対反対一カ国でも、国連決議を拒否出来るという不可解な国際機関でもある。

日本はその国連に過去六十年以上にわたって多額の資金提供をつづけている。その額は毎年、主要六カ国を超えているそうだが、国連での地位も発言権も、甚だ寂しい限りだ。では何故、そんな理不尽に見える事態が国連でつづくのか。

その一つの理由は簡単のようだ。日本という国は成金。金は出しても手足は汚さない。しかも、命のやり取りがつづく紛争や戦争地帯に、日本は決して人を出さない。それは日本国憲法に違反すると常に断る。しかし、紛争や混乱や戦争が世界中でつづく現在、金は出しても人出さず、という日本の姿勢が諸外国から批判的になっても仕方ない話だと私も思う。

我が国の憲法を大雑把にいうと、
—もう一切、外国には戦争を仕掛けません。武器も輸出しません。自国の平和と安全に全力を挙げ、国内は清潔で自由平等の社会にします。—

といったら語弊があるだろうか。

しかし時代は変わった。九・一一から世界進出を狙うかのような「アルカイダ国」の話まで、世界中で無数の戦争と紛争がつづくのは周知の話だ。その間に国連はなにが出来たか。日本および日本人はなにをしているか。話はここでまた飛躍する。

もしここで昭和から平成生まれの日本人が明治うまれるの直系であるなら、国民の間で一体どんな発言が生まれ、どんな行動に移ったか、考えてみてはどうだろうか。

私の両親も継母も、明治半ば生まれの典型的な明治人間だった私は思う。その親達について考える時、じゃ私が渦中に出掛けると父はいい、継母なら貴男は立派な武士の末裔として独自に考え、行動しなさい、というに違いはない。

明治と昭和あるいは平成、この二つの時代の違いは非常に大きい。だが、その違いの根底にあるのは、きわめて簡単な話だと私は考える。いわく、身体を張り、自分の命を代償にしてもなにかをやり遂げるか。それとも安心・安全の世界に自ら閉じ籠り、台風一過を待ち望むか、ということに他ならない。

明治の日本人には強靱な意志と覚悟があり、そこから自然に生み出される決断の世界があった。そのすべてを、あるいは大部分を持ちえないのが現在の我々ではないだろうか。

こういうと、阿部首相や石破元幹事長は喜ぶだろう。しかし彼等の頭には自分が先頭に立って命を捨てようなどという意志など、どこを探しても見当たらない筈だ。多分、自分の子供と孫だけは、早くに外国留学への道を拓き、とぼけて遊び暮らせるような手段を講ずるに違いない。

無力な国連、無防備な日本国家、そして脆弱な日本人。その反対に、無手勝手流のアメリカがいて、傲慢無比な中国もいる。これではどこに活路を見出していいか分からない。

ある本の中で、
—すべての男は消耗品である。—
と論じた男がいる。その言はよし。ただし、中身の方は戴けない。

(十五) 環境ホルモンと食物連鎖

すでに、我々人間が加害者となって地球を汚染するという話を紹介した。ここでは人間が加害者であると同時に、被害者となる身近な環境問題の話になる。

二十世紀から二十一世紀に変わる直前、日本国内にも大きな波紋が広がった。それがつまり、ダイオキシンの代表される環境ホルモンの問題である。そのきっかけは一冊の本。確か九六年にアメリカで出版され、その二年後にはすでに日本国内でも翻訳で出版されている。

題名は「奪われし未来」、三名並んだ著者の中にJ・P・マイヤーズがいる。私はそのマイヤーズと当時トヨタ財団の常務理事だった黒川さんの仲介で出会うことが出来た。

季節がいつだったかは忘れたが、三人で会った場所は東京浅草にある江戸時代の助六にちなんだ宿で、そこは大学時代からの友人が経営していた。

簡単な挨拶の後、私達は一晩そこで話し合った。彼は今、環境ホルモン撲滅運動の旗頭として大きな組織をアメリカで立ち上げ、インターネットにも大々的なホームページを開いて活躍している。ただし、人間が自分の足元を知らずに汚染し、深刻な環境汚染に取り込まれる、という話題はマイヤーズ等から三十年以上も前に遡る。

R・カールソンとその著書「沈黙の春」。時代は確か一九六十年代前半。

女性の科学者を目指していたカールソンがふとした人生の悪戯から、農薬の深刻な問題に気付いたのだ。彼女がこの世界でとくに注目されたのは自然界の食物連鎖を農薬の有害性に結び付けたことにある。

農薬の有毒性は元々、国家から事前のチェックを受けている。原油等を原料とする化学物質はしかし、空中や地上にばら撒かれた後、地面に溜まる。

地面に溜まった農薬の多くは雨が降って川に流され、ある程度濃縮されながら河底に留まる。それを今度は小魚が毎日吸い込み、どんどん濃縮したまま一月か数カ月にはわたって生き長らえる。

それを今度はもっと大きなウナギや鯉が食べて一層濃縮し、残りは近くの海へと流される。その海でも、同じ循環が起こり、最後に我々人間が超濃縮された沿岸の魚を口にする。

生物学者マイヤーズの研究フィールドはアメリカの五大湖。そこに棲む白頭ワシの生態を彼は追っていたが、白頭ワシの世界に次々と起こる異常現象、つまり奇形の多発と無精卵の拡大という現実には驚き、周囲を見渡した。

そこにはまず、週末になると多くの人々が集まり、サケやマス釣りに興ずる姿がある。そんな人々はまた、釣り果のサケ類を持ち寄り、ホームパーティーを毎週楽しむ習慣がある。そしてそんな仲間の若い女性の中に生理不順や不妊を訴える人の非常に多いのが分かったのだ。

マイヤーズは再び辺りを眺めた。すると五大湖の沿岸にかの有名なGEの工場があつて、その近くでは浅い湖底に自然値より遥かに多量のPCB（絶縁材料）が見付かったのだという。

PCBが絶縁材料とすればダイオキシン類は農薬の中に含まれる化学物質の一部。それらが自然循環の流れに沿ってまず濃縮され、つぎに魚や動物間の食物連鎖過程で、予想外の濃縮作用を受ける。

高々、一ミリでスタートした筈の物質が次の段階で十ミリまで濃縮され、最後に猛禽類や人間が体内に取り込んだ後は一万倍にも十万倍にも濃縮されて、生命活動の根幹をなす生殖力の減退や破壊へと導く。

最初の無害が次にやや有害となり、最後は最悪の悪魔となつて鳥にも人間にも襲い掛かる。それらの物質を総称して環境ホルモンというが、内容が分かる名前というと、PCBもダイオキシンもホルモン攪乱物質ということになる。

ここで医学や生理学の詳しい話はさておき、私的な話に立ち戻る。

私が五九歳で、子宮内膜症を患っていたことのある二度目の妻が四一歳の時期は丁度二〇〇〇年の四月、その時、子宮の未発達や子宮内膜症と同時に、ひどい月経不順に悩んでいた妻が初めて女の子を出産した。

その前、私は子宮内膜症と環境ホルモンの関係を妻に説明し、出産を止めるように説得していた。しかし彼女は、自分がこの世に生きた証として産みたい、といって聞かなかった。そこに私は、女性という男性とは違う生物の覚悟と決断の素晴らしさと怖さを感じた。ただ、母乳で育てることだけは妻も私の意見に従った。

その一年後、妻の月経周期は正常に戻った。二十代からつづいた三カ月に一度一週間という異常な月経周期が消えているという。さらに出産から六年後、その娘は外科の手術で右足にあつた六本目の指を切断した。しかし、その傷跡はもう見当たらない。

—これでよかった!—というべきか、あるいは、

—問題はこれからだ。—

その判断は難しい。

GEは今、数千億円の資金を出し、J・P・マイヤーズの環境ホルモン撲滅関連事業を支えている。それを贖罪行為というべきかどうか、GE経営者が本音でなにを考えているかは分からない。

環境ホルモンの影響をもろに受けている妻と子供を実家に残し、遠く離れた故郷の片隅で、私はこの原稿を書いている。

(十六) 人間とギャンブル(競馬とパチンコ)

毎週のように、競馬場に出掛ける人がいる。毎日のように、近くのパチンコ屋に通う人も多い。

彼等が家を離れる時、ポケットの中の財布を調べ、不足しそうな金額をその中に追加する。自宅玄関を出る時は静かに、家族の顔を避けながら目的地に向かう。

日本全国の競馬場の総売り上げは知らない。ただし、どこかで聞いた話では、国内のパチンコ業界の年間総売り上げは二十兆円に達するという。その金額は自動車メーカーとして世界に名を轟かせるトヨタの年間総売り上げに匹敵するのではないかと私は思う。

幾ら金を支払っても、車を買えば車は手元に残る。しかし、競馬とパチンコの場合、手元になにも残らなくも、財布の中はからっぽになる。そして本人は一刻悩むが、

—また次がある。明日があるじゃないか。—

—といって自分自身を慰める。

競馬に狂って財産を失った人は少なくない。自殺にまで追い込まれた人の話も耳にする。それは常に身近なパチンコ狂いの場合に相通ずる。

ふと気付くと、彼等は大当たりを夢見ている。決して家族を苦しめていることを考えない。たとえ反省して考えるにしても、そのことはすぐにも忘れてしまう。

こうしたギャンブルと人間の関係は昔から現在、現在から未来永劫に引き継がれる。ただし多くの人は、そのカラクリに気付かない。

一般心理学の中に学習とか習慣の形成を取り扱う分野がある。それを専門

領域では学習心理学と呼ぶ。

人間は学習する動物だという。他の動物に比べ、学習能力の面で一段高い位置にいるのが人間だともいわれる。しかしすべての人は、学習の基本メカニズムを知らない。家庭内で知らずに子供になにかを教え、何かを躰（良き習慣）ようとして日々暮らしている。ではギャンブルに走る人間には、止めさせる手立てはないのか。

ギャンブルに出掛けるには本人の意志、つまり漠然とした意味での決断が必要になる。ただしそれは、本人自身の意思決定という問題に限られるのかどうか。

そこで学習心理学はいう。

—お前は単に操られているだけだ。—

では誰がどうやって彼等ギャンブル狂を操っているのか。

基礎的な学習心理学では、人間や動物の行動を一定の方向に促すとき、なにか報酬（リワード）を用意する。その報酬の中には罰という報酬も含まれる（負の報酬）。またお菓子や果物も報酬になる（正の報酬）。いずれにしても、誰かがなにかをしたとき、規則的な報酬を相手に与えれば、学習も習慣も成立する。

ところが、一般の通念に反して、それらの学習や習慣を確固たるものにするために明確な方策が確立されているのだ。部分強化、この聞きなれない言葉の意味するところはこうだ。

人間や動物がある行動を起こす。その直後に、黙って相手に報酬を与えれば、その行為もしくは行動は強化され、負の報酬なら止めてしまい、それが正の報酬（褒美）ならば、その後定着して繰り返し現れるようになる。

—そんなことは素人でも日常的にやっているよ。—

といわれても、専門家は無下に反論しない。しかしである。

一般の人の常識なら、子供達のある行為・行動に対して常に規則正しく報酬を与えなければならぬ、ということになる。だが、その望ましき行為・行動もしくは習慣が破壊から免れるためには、絶え間なく連続して報酬を与えつづけては駄目なのだ。

実験室のハトは七百回に一回の報酬（大豆）である習慣を身に着け、その行為を忘れなかったという報告がある。またネズミやモルモットの場合、十回から三十回の間欠した報酬で様々な習慣や行為を身に着け、確実にその行為をつづける。これこそ、部分強化という手法の独壇場なのである。

これを換言すると、人間は毎回多くの金をギャンブルで失い、稀に少額でも金を手に出来るからこそ止めない、止められないという悲劇に繋がるのである。

だから多分、競馬もパチンコもこの経済重視主義の社会からなくなることは

ない。そして、大金を使い果たした本人とその家族の悲劇に終わりはない。たとえ奇特な人がいてギャンブルを止めるにしても、その後には百人、千人といった新たなギャンブル狂が待っている。

ギャンブルをするかしないか。それは一見、人間の自発的な決断行為に思える。しかし、ギャンブラーは数少ないチャンスに惑わされ、狂わされたままこの世を去る運命にあるのだ。

ここで部分強化の話は取り敢えず止めて、ただ一つの言葉を残したい。

人間の常識には落とし穴がある。それに早く気付かなければ、後悔のない人生は送れない。

(十七) タイミング

ある人が決意するとき、行動にすぐ移さなければ問題も起きない。しかし、それが決断になれば話が違う。決断は行動に直結しているからだ。ただし、この二つの言葉については改めて話す。

実験心理学で学習の研究をしていると、タイミングの問題が鮮明に出てくる。つまり、ある行動の直前に報酬を与えても、多くの動物は学習しない。それと同時に、ある行動の終了から報酬までの間に三十秒も経ってしまえば、やはり動物も人間の子供も学習が遅れる。

一般の人間社会では事前通知と事後連絡という点がこれに重なる。ある社員が事前に自分のこれから始める行動を連絡しておけば、課長の印象もよくなり、アイツはいい、とか アイツは信用出来るといつて褒められる。

一方、これが前後逆転し、事後連絡とか事後通知となれば話が変わる。課長はむくれ、その社員に悪感情も抱きかねない。ひよつとしたら、仕事上のいびりとか、イジメという話が出てくるかもしれない。

話を家庭の中に移す。そこでは大抵の場合、目の前の子供に向かって母親の愚痴や叱責が飛び交っている。母親は他の仕事をしながらでも、常に子供を叱っている。その声や言葉が子供の心になにを残すか、母親は余りにも気にしない。

女が三人いれば、女性特有のおしゃべりが始まる。それには休憩時間も、沈黙の時間も含まれない。口から産まれた子、とはまさに至言だと私も思う。

だが、まだなにもしていない先から小言をいわれたり、一週間前の出来事に文句をたらたらいわれると、どんな家庭の子にも反発が起こる。反発はやがて母親への無関心や無視に変わり、最後は母子間の完全断絶にもなりかねない。それでも子供が悪く、自分が正しいと母親は思っている。

「子供にはいつもいつているのですが、……………」

とか、

「普段からいつているのですが、あの子は耳をかさないんです。性格が元々、悪いのでしょうか、あの子は、……………」

これが止めどなくつづく母親同士の会話なら、

「そうだ、そうよね。私の家もまったく同じ。困っちゃうのよねえ。」

で済んでしまうが、本当の話は口数もタイミングも自分で制御しない、あるいは自分で制御出来ない母親側に問題がある。

その上、一人の時間が多い専業主婦の場合、感情の苛立ちが隠せない。だから、一番目に付く自分の子供にそのはけ口を求め、感情的にものをいう。これこそまさに最悪。日々延々とつづく日常生活で、これほど愚かなことは他にない。

沈黙は金なり

母親の百万遍の小言より、父親の一喝

座して時を待つ

すべてに時がある

こうした古き言葉は真実を貫く。しかし、そんな母親は聞く耳を持たない。行動を即座に伴う決断にも、タイミングという面が最重要課題になる。いつ、どこで、誰に自分の決意を告げるか。それによって、敵もできれば味方も変わる。本来、多くの賛同をえられる筈の決意ですら、切り出すタイミング次第で極端な反発や反対意見に苛まれる。

これに関連して、少し話は横道にそれる。

今から四十年前、私は京都大学の霊長類研究所に居て、個々のサルについて知能を測定していた。装置も仕掛けも簡単そのもの。ある信号が出た後、プラスチック板の穴についている小さな窓を叩けば、一粒の大豆（報酬）が飛び出し、サル達はその好物を手に入れることが出来る。ただし、そこに制限時間があった、信号が出てから十秒以内に反応しなければもらえない、というものであった。

その仕掛けを覚えるのに多くのサルは苦勞しない。ただ、ある一頭の牡ザルには気が付くと、とても妙な習癖も現れた。

彼は事前のサインを見付け次第、まず無造作にプラスチックのパネルを叩く。それにつづいて、彼は正解の反応を示し、他の仲間同様に、毎回一個の大豆を手に入れる。しかもこうした連鎖反応を千回やっても二千回やっても止めようとしらない。

これを難しくいうと、**迷信行動**、と呼ぶが、つまりは人間が縁起を担いだり、無駄を承知で毎日遠回りするのと変わりない。

しかし、だからといって、サル達を馬鹿にしてはいけない。反省だけならサルだつてする、という言葉も戴けないし、失礼だ。

意味が本来なかったり、昔だけ意味があつた儀礼や儀式や神輿行列にしたところで、千年余りもそのまま引き継いでいる我々人間のお祭り騒ぎを忘れては困る。もつと端的な例を挙げれば、受験直前の子供達が暮から正月に近くの神社に出掛け、御神籤を引く習慣だつて理に合わない。

サルは自分にとって意味のない訓練の果てに、反省のポーズだけを覚えさせられる。しかし実際のところ、サルという動物に反省はない。反省はただのポーズ、どこかに沢山いる政治家の姿によく似ている。

(十八) 決心・決意・決断

話は前後するが、ここでこの本の核心となる**決断**という言葉(用語)について言及したい。方法は比較、対象は**決心**と**決意**の二つ。

多くの人は日常的に、

―決心したよ、とか、決めたわよ。―

―という言葉を使う。この言葉の背後を考えると、

―でもな、また変わるかもしれない。―
とか、

―一時的なことかもしれないけどね。―

―という言葉になつて聞こえてくる。つまり、この決めたとか決心したという表現は本来、軽い意味から出る言葉として誰もが気軽に使っている。

―取り敢えず、今の自分はそう思っている。―

―という程度の意味しか持たない言葉なのだ。

次に、決意という言葉がある。これは日本の政治家が最も得意とする言葉の一つ。また政治家連中が頻繁に使う言葉を探してみると、前向き・全力・誠心誠意・一命を賭けて、等の言葉も頭に浮かぶ。

これらを運動表現に変えると、

前向きにやります。全力で完成させます。誠心誠意をもって取り組みます。あるいは命懸けでやります。ということになり、物事に立ち向かう姿勢に関わる内容がすべての言葉表現に含まれている。しかし、それらはすべては常套句。そんな言葉を政治家から繰り返し聞きかされる人間は誰一人、最初からそれらの言葉に関心もなく、意味があるとも思っていない。

ただ本来なら、決意という言葉にもつと別な意味が含まれている。意味とどうか、なんらかの響きとして別の印象を他者に伝える言葉だと思う。

つまり、決心にとっては、他者という存在を必要としない。反面、決意には他者という存在が必要となり、社会も必要となるだろう。

―僕は来年、一流大学に合格するぞ。俺は次の大統領を目指す。私は相手の姿もまだ見えないけれど、来年こそは結婚するんだ。―

これこそ断固たる自分の決意表明。聞く方にも、口にする方にも、一種の緊張感が走る。

だが、こうした決意表明には必ず、逃げ道が用意されている。それは決意の内容が実現できず、不成功に終わったときの弁解もしくは自己弁護といった言葉である。

―結局、駄目でした。俺の努力が足りなかったんだ。時期が悪く、競争相手も私にとって悪過ぎた。好きになった人もいたんだけどね、相手は困ったことに、まだ結婚する予定がないのよ。―

それはいずれも事実かもしれない。しかし、だからといって、決意を表明した人々の中に、自分自身を苦境に追い込むような人間は見当たらない。そこに、次に話す決断とこの決意との根本的違いが見えている。

決断という言葉は本人が次に起こる行動を明確にしている。しかもそこには、不退転の覚悟が見える。「決」とはきめること、「断」とは他の選択を切り捨てたり、完全に無視することを意味する。これは戦国時代の「陣」という場面に重なる。

自らを剣ヶ峰に追い込む。死に装束で火中に飛び込む。全財産を賭けてこれにあたる。これらは決心でも決意でもなく、まさに決断そのもの現している。

さてここで、言葉遊びに終わりそうな話に区切りをつけ、限らない重みのある話に切り替えたい。それはつまり、あの小野田少尉の姿を次の舞台に引き出すことだ。

(十九) 小野田少尉

私がまだ若かった時代、ある日ある朝のテレビで小野田少尉発見というニュースが流れた。そのニュースの具体的な内容を耳にした時、私の身体に衝撃が走ったのを今以って覚えている。

私にとって、小野田少尉の名前など関係ない。ただ、職業軍人としての少尉という肩書が重要なのだ。

当時、あれだけ騒がれたその小野田少尉はこの一月(二〇一四年)、日本国内でひっそりと息を引き取ったという。そのことを私はこの原稿を書きながらインターネットを通じて知らされた。

昭和の五十年前後、戦後から三十年近く経過していた日本は当時、自信満々と世界の経済大国への道を歩んでいた。私はその頃に四十代を目前に控え、

アラスカでのオオカミ研究に出掛けるかどうかで悩んでいた。

南太平洋に浮かぶ島ルソン。そこに小野田少尉は正式な終戦の通知を直接上官から受け取れず、青年士官そのままの姿勢で、最後の決戦の時に備え続けてきたという。

それはまさに、今の日本人の間では理解という言葉を遙かに超えた世界。想像することすら出来ない極限の日々。飢え、渇き、不安と恐怖、そして孤独との戦い。

軍人勅語に書かれていたという軍人精神、つまり、己の一命を天皇に捧げるという基本を忘れず、熱帯雨林をただひたすら漂いつづけた三十年という膨大な時間。そんな小野田少尉は日本もしくは日本人にとつて英雄なのか。それとも、気の狂った軍人の一人なのか。

羽田空港に着いた飛行機のタラップ上に現れた時、私は見た。彼の右手がサツと上がったのを。それこそ、理になかった日本軍人の正式な敬礼だった。

「小野田少尉、ただ今帰ってまいりました、……………」
彼が口にした最初の言葉は確か、そんな風に聞こえてきた。当然といえば当然だとも言えるそのきりつとした言葉を口にした時、私の眼には彼の口の右側から漏れる唾液の片鱗も見えていたような気がする。

小野田少尉、昭和十六年生まれの私にとつては、日本軍人の凛々しい敬礼の姿や軍人精神なるものをまったく知る由もなかったのです。なのに、私は初めて見る貴男の姿に、日本軍人の雛形を予感しました。これは一体、何故でしょうか。どうして、そうなったのでしょうか。私には未だに、その答えが見えません。

顧みると、あの小野田少尉は確かに職業軍人だったのだろう。だから、彼は間違いなく志願兵となる決意をいつかどこかでしていたに違いない。

―二度と故国に戻らじ。二度と生きて故郷に帰らじと。―

それを小野田少尉が自分で下した最初の決断とすれば、ルソン島で生きる日々の中で彼は三十年間、常に決断と決断の狭間で生き抜いてきたことになる。

こんな平和な日本、これほどすべてが溢れている日々。二一世紀に入った今、こうした厳しい小野田少尉の話を持ち出すのは、やはりどうかと自分でも思う。ここまで書き進んでいながら、本人ですら苦笑いが時折浮かぶ。でも、私は小野田少尉に関連して、書くことを止められない。

あのニュースが国内に流された当時、多くの日本人が多大な衝撃を受けた

はずだ。しかし今はどうだろうか。誰かの記憶の中に生き生きと浮かび上がっているだろうか。

すべての人間にとって、決断とはなにか。決断する人生と、決断を避けて終わる人生。そこにはどれほどの違いがあるのか。

十六歳、高校二年の支笏湖投身自殺。心理学から行動学へ。行動学から動物社会学を経由して動物環境学へと辿った長い年月。

一つの専門領域に没頭しつづけた仲間の研究者からは半端人間と思われ、身近な知人・友人からは奇人・変人と蛇蝎されることもある。さらには七人もいた兄弟からは絶縁状まで叩きつけられた人間。そんな人間を理解する者は自分の子供達の間にはさえ期待出来ない。

でもここに、悪戦苦闘の人生に満足している者がいる。本人は今も、
―あれも人生、これも人生。―と言って憚らない。

私という人間にとって、人生は山登り。アラスカでようやく出会ったオオカミの群がエベレストの山頂。五十代に誘われて出掛けたロシア領ベーリング海のトド研究はヨーロッパアルプスの登山に例えられる。ある瞬間ともいえるフィールドの日々こそ、私という人間の核心部分をなしている。

小野田少尉、貴男が苦難を乗り越え、生きて故国に戻られたことに心から感謝しています。私はあのタラップ上で貴男が見せてくれる敬礼の姿を忘れません。享年九一歳、その冥福を祈り、静かに一人手を合わせます。

十一月五日、北国のニセコでは二日前の雪が軒下に残り、流石に寒くなってきました。庭の紅葉もすっかり落ちて、大地の一部を紅色に染めています。

秋から初冬へ、遅ればせながら、私も貴男の姿の跡を追って、わずかに残されているであろう人生を歩みつづけます。貴男のあの世における安らかな日々を祈りつつ。